

石川啄木直筆資料展

「明治42年4月～12月の書簡より」

函館市文学館では、石川啄木の直筆書簡121通を収蔵している「函館啄木会」のご協力をいただき、毎年4月と10月に「石川啄木直筆資料」の展示替えを行っています。今年度下期は、明治42年4月～12月に東京の本郷から函館の宮崎大四郎(郁雨)に出した書簡4通とはがき1通を展示します。

明治41年4月に単身上京をした啄木は、明治42年春には、知人の紹介で念願の就職が決まり、東京朝日新聞社での新たな活躍が始まります。4月の書簡では、東京での生活の基礎が固まりながらも、小説を書くことに行き詰まる様子や、金銭的な問題で未だ家族を東京に呼び寄せることができない苦悩が読み取れます。6月16日には、宮崎大四郎(郁雨)が同伴して上京した家族との生活が始まりますが、直前の書簡では体調を崩していたこと、家族を受入れる応急準備をすることが書かれています。7月の書簡では、郁雨の結婚について祝辞を述べながら、結婚というものに対して大きな希望をもってはいけないと書いています。また家族の上京直後の家計の絶望的なひどさや、こじれた家庭の様子、いたたまれなくなり家を飛び出してあてもなく電車に乗る様子など、啄木の様々な心模様があらわれています。同年秋には小説への挫折や妻節子の家出を機に、啄木は自己や社会から目をそらさず現実をみるようになったといわれています。12月になると父一禎も上京し、その後のはがきでは穏やかな気持ちで新しい年を迎える準備をする様子が見えます。

これらの啄木の直筆の書簡・はがきから、安定した職を得て生活が軌道に乗ったように見えながらも、一向に暮らし向きが改善しない悩み多き心境と、新年への希望を垣間見せる啄木の心情を感じていただけることと思います。

展 示 資 料

1. 明治42年 4月16日 宮崎 大四郎 宛書簡
2. 明治42年 6月10日 宮崎 大四郎 宛書簡
3. 明治42年 7月 9日 宮崎 大四郎 宛書簡
4. 明治42年 7月18日 宮崎 大四郎 宛書簡
5. 明治42年12月24日 宮崎 大四郎 宛はがき



会 期 令和3年10月9日(土)～令和4年4月5日(火)
(休館日：11/15～19, 12/8, 12/31～1/3, 1/13, 2/17, 3/17)

会 場 函館市文学館2階展示室